

A 竹の中で見つけた子

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って竹を取り、いろいろなことに使っていた。名は讃岐造磨といった。その竹の中に、根元が光る竹が一本あった。不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどの人が、とてもかわいらしい姿で座っていた。翁は「私が毎朝毎夕見る竹の中にいらっしゃることで分かった。私の子になるはずの人であるようだ」と言って、手の中に入れ、家に連れて来た。妻の姫に預けて育てさせる。かわいらしいことはこの上ない。とても幼いので、籠に入れて育てる。

②の現代語訳

竹取の翁はこの子を見つけた後、竹を取ると、節と節の間ごとに黄金の入っている竹を見つけることが重なった。こうして翁はだんだん豊かになっていく。

出典：作者未詳『竹取物語』冒頭「今は昔竹取の翁」から「豊になりゆく」まで

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

A 竹の中で見つけた子

練習問題 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い

答え：ようよう

解説 「やう」は現代仮名遣いで「よう」。読み方を直す問題なので「だんだん」と訳すのではない。

確認する内容 意味と表記を確認する。

問2 古語

答え：イ

解説 「いと」は程度が大きいことを表し、「美しうて」を強めている。

確認する内容 正答のみ。

問3 古語と文脈

答え：ウ

解説 三寸ほどの幼い子への親愛が中心。「うつくし」は古文ではかわいらしいという意味で用いられる。

確認する内容 正答のみ。

問4 省略された主語

答え：竹取の翁

解説 光る竹を見つけた人物から、主語が続いている。

別解・許容 翁

確認する内容 意味と表記を確認する。

問5 場面の確認

答え：ア

解説 「筒の中ひかりたり。それを見れば」と続く。籠は家に連れ帰った後の場所。

確認する内容 正答のみ。

A 竹の中で見つけた子

練習問題 | 答えと根拠 | つづき

問6 会話と判断 解答例 25字

解答例：自分が毎朝毎夕見ている竹の中に、その子がいたから。

解説 翁自身が「われ朝ごと夕ごとに見る、竹の中におはするにて知りぬ」と理由を述べる。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

確認する内容 毎朝毎夕見る竹であること／その竹の中に子がいたこと。字数の範囲と文末を確認する。

問7 出来事の因果 解答例 33字

解答例：子を見つけた後、竹を取ると、黄金の入った竹を繰り返し見つけたから。

解説 「金ある竹を見つくること重りぬ」と「かくて」をつなぐ。竹の販売で成功したとは書かれていない。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

確認する内容 子を見つけた後／黄金のある竹を繰り返し見つけたこと。字数の範囲と文末を確認する。

問8 内容の整理

答え：エ

解説 ①で子を見つけ、家へ連れて帰って妻に預ける。②では「この子を見つけて後に」と時の前後が示される。

確認する内容 正答のみ。

B 参拝での思い違い

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

仁和寺にいるある法師は、年をとるまで石清水八幡宮を参拝したことがなかったので、残念に思い、ある時思い立って、ただ一人で歩いて参拝した。極楽寺や高良などを拝み、これだけだと思い込んで帰ってしまった。

②の現代語訳

そして、そばにいる人に会って、「長年思っていたことを果たしました。聞いていた以上に尊くいらっしゃいました。それにしても、参拝した人がみな山に登ったのは、何があったのでしょうか。知りたかったのですが、神様にお参りすることこそ本来の目的だと思って、山の方までは見ませんでした」と言った。

③の現代語訳

ちょっとしたことにも、案内して導く人はいてほしいものである。

出典：兼好法師『徒然草』第52段「仁和寺にある法師」全段

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

B 参拝での思い違い

練習問題 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い

答え：もうで

解説 「まう」は「もう」となる。

確認する内容 意味と表記を確認する。

問2 古語と心情

答え：ア

解説 参拝していなかったという直前の事実が理由。「心うし」はここでは残念でつらいという心情。

確認する内容 正答のみ。

問3 省略された主語

答え：仁和寺の法師

解説 ①の行動を語っているのは参拝から帰った法師。「傍の人」は聞き手。

別解・許容 法師

確認する内容 意味と表記を確認する。

問4 認識の違い

答え：イ

解説 語注の位置関係と結び付ける。法師は山上の中心となる社を参拝していない。

確認する内容 正答のみ。

B 参拝での思い違い

練習問題 | 答えと根拠 | つづき

問5 理由 解答例 34字

解答例：神への参拝が本来の目的で、その目的は山麓で既に果たしたと思ったから。

解説 「神へまゐるこそほいなれ」と「かばかりと心得て」を結び付ける。山の参拝が不要という事実ではなく、法師の判断を書く。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

確認する内容 神への参拝が目的／その目的を既に果たしたという思い込み。字数の範囲と文末を確認する。

問6 語句の抜き出し 8字

答え：ゆかしかりしかど

解説 「ゆかし」は知りたい・見たいという気持ち。「しかど」はそう思ったが、というつながり。

確認する内容 本文と一致すること。

問7 現代語訳 解答例 30字

解答例：ちょっとしたことにも、案内して導く人はいてほしいものである。

解説 「あらまほし」はあってほしいという願い。法師の会話が終わり、筆者の評価になっている。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。字数の下限は設けない。必要な意味を保つ簡潔な訳も認める。例：「小さなことにも、案内人はいてほしいものだ。」

確認する内容 小さなことにも／案内する人／いてほしいという願い。上限字数と文末を確認する。

問8 話の構成

答え：ウ

解説 行動の①、法師の会話の②、筆者の結論の③という構成。本文に反省や人々の笑いはない。

確認する内容 正答のみ。

C 季節を味わう目

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

春は明け方がよい。だんだん白くなっていく山の稜線近くの空が少し明るくなり、紫がかった雲が細くたなびいている。夏は夜がよい。月の出ているころは言うまでもない。闇の夜もやはり、蛍が飛び交っているのは趣があり、雨などが降るのさえ趣がある。

②の現代語訳

秋は夕暮れがよい。夕日が明るくさして、山の稜線近くにととても近づいたころ、鳥が寝る所へ行こうとして、三羽四羽、二羽などと飛んでいくのさえしみじみと感じられる。まして雁などが列になったものがとても小さく見えるのはたいそう趣がある。日がすっかり沈んで、風の音や虫の声などはたいそうしみじみと感じられる。

③の現代語訳

冬は雪の降っているのは言うまでもなくよい。霜などがとても白いのも、またそうでなくてもとても寒いのも、火などを急いでおこして炭を持ってあちこちに行くのも、とてもその場にふさわしい。昼になって暖かく寒さがゆるんでいくと、すびつや火桶の火も白い灰が多くなっているのはよくない。

出典：清少納言『枕草子』冒頭「春は曙」全体

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

C 季節を味わう目

練習問題 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い

答え：ちいさく

解説 語の途中の「ひ」を「い」に直す。
確認する内容 意味と表記を確認する。

問2 古語

答え：ウ

解説 ここでは夏の夜の風景を味わい、趣があると評価している。現代語の「おかしい」とは意味が異なる。
確認する内容 正答のみ。

問3 描写の対応

答え：ア

解説 「白くなりゆく山ぎは」と「紫だちたる雲」を取り違えない。
確認する内容 正答のみ。

問4 表現の効果 解答例 33字

解答例：月夜や蛍の夜だけでなく、雨の降る夜にも趣を感じていることが分かる。

解説 「さらなり」で月夜を当然よしとし、闇夜、さらに雨の夜へと味わう範囲を広げている。
別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。
確認する内容 月夜・蛍の夜以外にも／雨の夜にも趣を感じる。 字数の範囲と文末を確認する。

問5 視覚から聴覚へ 7字

答え：風のおと虫のね

解説 日が沈んだ後は風や虫の音に注意が移る。本文の旧字体を改めた掲載表記に合わせる。
確認する内容 本文と一致すること。

C 季節を味わう目

練習問題 | 答えと根拠 | つづき

問6 指示する内容 解答例 36字

解答例：昼になって寒さがゆるみ、暖房器具の火が白い灰の多い状態になっていること。

解説 直前の「ひるになりて」から「白き灰がちになりぬる」までが対象。冬全体を否定していない。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

確認する内容 昼になって寒さがゆるんだ時／暖房器具の火に白い灰が多い状態。字数の範囲と文末を確認する。

問7 構成

答え：イ

解説 四季の順に取り上げ、景物や生活の様子に筆者の感想が添えられる。

確認する内容 正答のみ。

問8 主題 解答例 45字

解答例：季節ごとの自然の細かな変化や、人々の暮らしの様子に目を向け、趣やふさわしさを味わっている。

解説 雲・蛍・鳥・音など自然の描写に加え、冬には火をおこして炭を運ぶ生活の場面がある。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

確認する内容 季節ごとの自然の細部／生活の様子／趣やふさわしさへの評価。字数の範囲と文末を確認する。

D 木登り名人の注意

全文の現代語訳 | 本文の段落番号に対応

次は本教材で作成した現代語訳です。意味の同じ自然な言い換えも認めます。

①の現代語訳

木登りの名人といわれた男が、人に指図して高い木に登らせ、梢を切らせた時、とても危なそうに見えた間は何も言わず、降りる時に家の軒の高さほどになって、「けがをするな。気を付けて降りろ」と言葉をかけた。

②の現代語訳

私が「これくらいの高さになれば、飛び降りてもきっと降りられるだろう。なぜそうに言うのか」と申したところ、男は「そのことです。目がくらみ、枝が危うい間は、本人が恐れておりますので、申しません。失敗は安全な所になってから、必ずするものなのです」と言う。

③の現代語訳

身分の低い人ではあるが、聖人の戒めに合っている。蹴鞠も、難しい所から蹴り出した後、容易だと思うと、必ず落ちるということであろう。

出典：兼好法師『徒然草』第109段「高名の木のぼり」全段

照合メモ 自分の読みと違った語や主語を確認しよう。

D 木登り名人の注意

Dのみ100点 | 答えと根拠

問1 歴史的仮名遣い〔8点〕

答え：あやうく

解説 語の途中の「ふ」が「う」になる。

採点の目安 正答8点。

問2 禁止〔8点〕

答え：イ

解説 動詞に付く終助詞「な」は禁止。ここでは木から降りる人にけがや失敗をしないよう注意する。

採点の目安 正答8点。

問3 会話の話者〔8点〕

答え：筆者

解説 「申し侍りしかば」と体験を語る筆者が木登り名人に尋ねている。

別解・許容 この出来事を見ていた筆者／兼好法師

採点の目安 正答8点。

問4 主語の補い〔10点〕

答え：ウ

解説 恐れているのは実際に高い枝にいる人。名人はその人が自分で用心していると考える。

採点の目安 正答10点。

問5 人物の判断〔10点〕

答え：エ

解説 ①「おるる時に軒だけばかりになりて」と明記される。

採点の目安 正答10点。

D 木登り名人の注意

Dのみ100点 | 答えと根拠 | つづき

問6 理由の説明〔16点〕 解答例 37字

解答例：高い所では、木に登っている本人が危険を恐れ、自分で十分に用心しているから。

解説②「目くるめき、枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば」が根拠。気付かなかったからではない。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 本人が危険を恐れていること8点／そのため自分で用心していること8点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

問7 現代語訳〔20点〕 解答例 26字

解答例：失敗は、安全な所になってから、必ずするものなのです。

解説「やすき」はこの場面では安全な・危なくない。「仕る」「候ふ」の丁寧さを自然な現代語にする。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。字数の下限は設けない。必要な意味を保つ簡潔な訳も認める。

採点の目安 失敗について述べていること5点／安全な所になってからという時点10点／必ずするという判断5点。内容点を合計後、上限字数を超えた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

問8 具体例と教訓〔20点〕 解答例 50字

解答例：難しい場面を切り抜けた後も、容易だと安心して注意をゆるめず、最後まで用心することが大切だという教訓。

解説 高い木から無事降りかけた時と、蹴りにくい所から鞠を出した後は、気がゆるみやすい点で共通する。

別解・許容 解答例と同じ内容なら、語順や表現が違ってても正答。

採点の目安 難所を切り抜けた後という場面6点／安心による油断を避けること8点／最後まで注意するという教訓6点。内容点を合計後、字数条件を外れた場合は1点減点する。0点未満にせず、同じ不足を二重に減点しない。

出典と表記について

古典原文の出典 | 現代語訳と解説は独自作成

本文は保護期間が満了した古典作品の原文です。Wikisourceの旧刊底本に基づく公開本文で確認しました。現代の翻訳・注釈や既存の試験問題は転載していません。

A 竹の中で見つけた子

作者未詳『竹取物語』冒頭「今は昔竹取の翁」から「豊になりゆく」まで

底本：国民文庫

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=竹取物語_\(国民文庫\)&oldid=161009](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=竹取物語_(国民文庫)&oldid=161009)

B 参拝での思い違い

兼好法師『徒然草』第52段「仁和寺にある法師」全段

底本：國文大観 日記草子部

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

C 季節を味わう目

清少納言『枕草子』冒頭「春は曙」全体

底本：國文大観 日記草子部 掲載名 枕草紙

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=枕草紙_\(國文大観\)&oldid=240238](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=枕草紙_(國文大観)&oldid=240238)

D 木登り名人の注意

兼好法師『徒然草』第109段「高名の木のぼり」全段

底本：國文大観 日記草子部

参照先：[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

本文の扱い

一部の旧字体を現行の字体に改め、踊り字を文字に開き、底本の割注・ルビを除きました。歴史的仮名遣いと語句は原則保持しています。段落分け・番号は教材用です。底本の違いにより、学校の教科書の本文と異なる表現があります。参照確認日：2026年10月7日。